

日本人・留学生混在クラスにおける日本語学習の試み - 両者にとっての意義と今後の課題 -

村松由起子

豊橋技術科学大学 留学生センター

1.はじめに

本学では平成15年度から大学院共通科目として「異文化コミュニケーション」を開講している。このクラスの特徴は日本人と留学生の混在クラスにおいて日本語運用能力の養成を試みていることである。本稿では、このクラスの概要、実践の変遷と改善点、日本人留学生それぞれにとっての受講意義、さらに今後の課題について述べる。

2.「異文化コミュニケーション」の概要

本学は工学系単科大学であるため、受講者は工学系修士課程の学生である。日本人、留学生を問わず受講でき、留学生の日本語レベルは初級終了程度から上級までかなりの幅がある¹⁾。受講者数は教室の収容人数の関係から毎年55名程度とし、日本人と留学生の割合は、平成15年度が35名:20名、平成16年度が42名:13名、平成17年度が50名:9名である²⁾。講義の目標は日本人と留学生で異なり、日本人に対しては、研究室等の留学生と日本語によるコミュニケーションを円滑に図るためのコミュニケーション能力を身につけること、留学生に対しては、日本人との会話を実践で練習し、日本語運用力を高めることを目標として設定している。

教材は「ヤンさんと日本の人々」「続ヤンさんと日本の人々」を使用し、講義は以下の流れで進めている。

- 講義の流れ：1．ビデオ視聴
2．教師による文法解説及び練習に関する指示
3．グループ学習
4．今日の記録記入

3.実践の変遷と改善点

講義は上記のように進めているが、年度ごとに若干の改善を加えている。教師による説明とグループ学習という2本の柱は変わらないが、進め方や指示の出し方に改善を加えている。ここではその変遷と改善点を述べる。

表 1 は平成 1 5 年度と平成 1 6 年度の講義内容を比較したものである。

平成 1 5 年度	平成 1 6 年度
1 . ビデオ視聴 (2 回)	1 . ビデオ視聴 (1 回)
2 . 学生による文法ポイントの抽出	2 . 教師による文法説明及び練習の指示
3 . 教師による文法説明及び練習の指示	3 . グループ学習(グループ学習用のプリント使用)
4 . グループ学習(日本語クラス用のプリント使用)	4 . 今日の記録記入
5 . 今日の記録記入	

表 1

平成 1 5 年度の講義では、2 の段階で「日本人学生が文法のポイントを抽出できない」、4 の段階で「グループ学習の時間が足りない」「日本語クラス用の練習プリント³⁾では日本人学生が練習のポイントや目的を理解しにくい」「留学生の日本語レベルの幅に十分対応できない」という問題が生じたため、平成 1 6 年度からはビデオ視聴の回数を減らし、学生に文法ポイントを抽出させる時間を省くことで、教師による文法解説及びグループ学習の時間を増やした。また、新たにグループ学習用のプリントを作成し、文法練習からビデオ内容に合わせたディスカッションまで段階を追って幅広く練習ができるようにした。

この改善によって、グループ学習の際に途切れがちだった会話が続くようになり、留学生のレベルに合わせてグループごとに練習の比重を変えられるようになった。

この流れの中における教師の役割として重要なのは、グループ学習の際に、教室内を巡回し、各グループの状況をよく観察することである。日本人学生が誤った説明をしていないか、活発に発言ができていないかなどを確認しながら、問題があれば助言をし、会話に参加する。また、今日の記録用紙にグループでは解決できなかった問題や質問を書いてもらい、それを次回講義の初めに解説することで、日本人がその場しのぎで誤った説明をしないようにしている。

グループは基本的にはくじで決めるが、同じメンバーが続くなどバランスが悪いときは教師が調整する。グループ替えは学期ごとであったり、2、3 回ごとであったりする。回数は留学生の人数や日本語レベルを考慮しながら決定しているので、年度によって異なり、今年度は 3 回を目安に行っている。

4. 日本人学生、留学生それぞれにとっての受講意義

まず、留学生にとっての受講意義について、日本語学習の点から述べる。

平成 1 4 年まで大学院留学生向けに「日本語 S (初級会話)」を開講し、「ヤンさんと日本の人々」を使用していたが、平成 1 5 年度のカリキュラム見直しで廃止と

なった。平成15年度から開講した「異文化コミュニケーション」はこの「日本語S」の内容を踏襲している。そこで、平成14年度の期末試験問題を使って、両クラスの日本語能力を比較し、日本語学習の点から効果に差が見られるかを調査した。詳細は村松(2004)にて報告しているが、以下に結果のみ掲載しておく。

	日本語S(H.14)	異文化コミュ(H.15)
1)全体の平均点	87.1	89.6
2)学部からの進学者を除いた平均点	87.1	86.4
3)研究生経験者の平均点	85.0	88.3
4)英語特別コースの平均点	86.4	78.6

表2

平成14年度4)英語特別コースの平均点が高いのは、日本語レベルの高い学生が一名いたためである。受講する前の日本語能力を調査していないので、このクラスを受講したことによる学習効果は不明だが、2)を比較すると両クラスはほぼ同じような結果が得られたと考える。また、留学生の受講感想を見ると、受講者自身も意義を感じていることがわかった。以下に感想の一例を掲載しておく。

こんなに先生とグループの両方教えてもらえる授業の形式はわたしにとって初めてですから、とても面白かったと思います。普通のクラスに比べて非常に活発でした。

(中国 初級終了程度レベル)

次に日本人にとっての受講意義について、外国人にとってわかりやすい日本語を意識できるようになったかという点から述べる。

平成15年度の受講者に10の文を示し、留学生にとって難しいと思われる箇所を修正するという作業を1学期の最初と最後に行ってもらい、修正の仕方に差が生じたかどうかを比較した。留学生には実際に難しい箇所に下線を引いてもらい、その箇所と日本人が修正した箇所が一致している割合を調べてみた。詳細は上記と同じく村松(2004)で報告している。その結果、グループ内に初級留学生がいた場合は留学生の指摘箇所と一致しやすくなる傾向が見られた。また、文中にあった「窓口」「蚊にさされた」「やり直し」などは留学生は難しいと指摘しているが、日本人学生のほとんどは修正しておらず、箇所によって一致しやすいものとそうでないものに分かれる結果となった。

また、平成17年度の受講者には「初級終了程度の留学生に対する駅までの行き方説明」を初回に書いてもらい、それを1学期最後の講義時に修正してもらった。

1)2)はその一例である。()は修正理由である。

1)降りるバス停は最後ですので、最後のバス停で降りてください。

修正 最後のバス停で降りてください。(ムダな文を省く)

2) 乗るバスは「豊橋駅前」行きです。それ以外は乗らないでください。

修正 「それ以外...」は削除する。(勘違いするかもしれない)

平成17年度はほとんどの留学生が中級以上のレベルであるため、初級終了程度というレベルを把握しにくかったようであるが、それでも、必要以上の情報を与えないほうがよいと考えるようになったことが伺えた。

5. 今後の課題

現在の問題点は、グループ学習の際、留学生がまとめ役になりがちで、留学生の日本語レベルが高いほどその傾向が強いこと、ディスカッションの内容が経験の紹介や感想程度に留まってしまうことである。例えば、バスの中で年配の人に席を譲るかという話題が出ても、はい、いいえで答えるレベルに留まってしまい、シルバートの必要性や席を譲る際の判断基準などまでは発展しない。使用教材には日本事情や日本文化的な要素も含まれているため、話題づくりはしやすいが、単にお互いの国の事情について紹介し、相違点があるかを確認する程度になりがちである。

日本人の場合、グループの人数が少ないと積極的に発言する傾向が見られるので、1グループの人数を減らすという方法もあるが、留学生の受講者が少ない場合は人数調整が難しい。また、ディスカッションが発展しない一因として、留学生、日本人とも自分の国の事情についてあまり知識を持っていないことが考えられるので、今後は講義の流れの中に「調べる」という段階を加える予定である。

1) 学部からの進学者の日本語レベルは中から上級である。大学院からの入学者には、日本語研修コース修了生、研究生経験者、英語特別コース生があり、日本語レベルは概ねゼロから初級終了程度である。

2) 留学生の受講者数が減少しているのは、英語特別コースの学生と研究生の受講が減ったためである。両者とも受講対象者ではないが、希望があれば可能な範囲で受講を許可している。

3) 後述の4で述べる「日本語S」クラスで使用していたプリントを利用した。

参考文献

村松由起子(2004)「日本語初級ビデオ教材を利用した日本人学生・留学生混在型クラスの日本語学習の視点から見た有効性」『雲雀野』第26号 豊橋技術科学大学紀要

村松由起子(2004)「母語話者・非母語話者間のコミュニケーション環境を生かした語学講義の実践」外国語教育メディア学会中部支部第63回支部研究大会 口頭発表資料